

# 車中泊の悲劇一度と

2016年4月に2度の最大震度7を記録し甚大な被害が出た熊本地震では、多くの被災者が車中泊避難を選んだ。狭い車で身を寄せ合って避難するなかで、体調を崩して亡くなる人も出た。助けられた命があったはず。当時、熊本市職員として災害対応にあたった男性は、そんな思いで会社を作り安全な車中泊の模索を始めた。あの悲劇を繰り返さないために。14日、熊本地震から9年となった。



車中泊に適したシートアレンジなどを説明する大塚和典さん（熊本市南区で4日）

## 元市職員 避難改善へ起業 教訓を発信

24年12月上旬、外灯が照らす熊本市東区の市動植物園の駐車場に、30台を超す車が並んだ。市民ら約50人が車内で一夜を明かした車中泊イベントだ。「寝るとき以外は体を動かしてください」。企画した、同市の防災ベンチャー企業「Bosai Tech」社長の大塚和典さん(61)はこう呼び掛け、足を伸ばしやすしいシートアレンジや十分な水分補給の重要性を説いて回った。熊本市や宗城大(同市西区)と連携して開催した、車中泊避難者を受け入れる「車中泊パーク」(仮称)実現に向けた取り組み。トイレや外灯を備える駐車場をあらかじめ地域ごとに指定し、平時から公表するもの。避難者を集約し、健康上の助言や必要な物資を行き渡らせることを狙う。デジタル技術の活用も採り、避難者がスマートフォンで氏名や家族の状況などを入力し自治体側が共有できるアプリを開発。AI(人工知能)の自動分析で、保健師の派遣など、避難場所ごとに適切な支援策を提案できる機能強化も図る。

24年12月上旬、外灯が照らす熊本市東区の市動植物園の駐車場に、30台を超す車が並んだ。市民ら約50人が車内で一夜を明かした車中泊イベントだ。「寝るとき以外は体を動かしてください」。企画した、同市の防災ベンチャー企業「Bosai Tech」社長の大塚和典さん(61)はこう呼び掛け、足を伸ばしやすしいシートアレンジや十分な水分補給の重要性を説いて回った。熊本市や宗城大(同市西区)と連携して開催した、車中泊避難者を受け入れる「車中泊パーク」(仮称)実現に向けた取り組み。トイレや外灯を備える駐車場をあらかじめ地域ごとに指定し、平時から公表するもの。避難者を集約し、健康上の助言や必要な物資を行き渡らせることを狙う。デジタル技術の活用も採り、避難者がスマートフォンで氏名や家族の状況などを入力し自治体側が共有できるアプリを開発。AI(人工知能)の自動分析で、保健師の派遣など、避難場所ごとに適切な支援策を提案できる機能強化も図る。

い状況に陥った。同じ姿勢を続けることで血圧がでる「エコノミークラス症候群」などの危険性は認識されていたが、十分に伝えられなかった。「避難所以外の情報はほとんど入ってこなかった」。大塚さんは当時を振り返る。市観光政策課職員だったが、急ぎ支援物資の拠点運営を担当。物資の配送から戻った自衛隊員からの「公園に車中泊避難者がいた」などの断片的な情報に対応するのがやっとだった。こうした状況が悲劇にもつながった。熊本地震では熊本、大分両県の死者278人のうち、直後の大雨による5人を除いた関連死は、直接死の50人を大きく上回る223人になった。車中泊経験者が体調を崩し、亡くなる事例も相次いだ。

大塚さんは、熊本地震の2年後に異動した市危機管理課で本格的に防災を学び、23年1月には民間資格の1級危機管理士を取得。熊本地震の関連死の状況も調べ、「地震から助かった命を守れなかった」と車中泊支援の重要性を痛感した。24年1月の能登半島地震では、被災地支援で石川県珠洲市に派遣され、被災者が各地で車中泊避難を余儀なくされる現状を目の当たりにした。各地からの応援職員らが役所の床や廊下などで寝泊まりして疲弊するなか、旧知のキャンピングカーの業界団体幹部に協力を依頼。キャンピングカー60台を用意してもらい、珠洲市や同県輪島市で活動する応援職員らに開放した。こうした経験が「正しい車中泊」



狭い軽自動車の中で車中泊避難を振り返る富永真由美さん（熊本市中央区で1日）

### 「より細やかな支援を」母が関連死の66歳

「あのときは車中泊しか選択肢がなかった」。そう振り返るのは、母親の津崎操さん(当時89歳)を関連死で亡くした、熊本市中央区の富永真由美さん(66)。2016年4月14日夜の熊本地震の「前震」後、母と夫、愛犬とともに軽自動車に逃げ込み、相次ぐ余震に震えて過ごした。

近くの小学校が避難所になっていたが、寝たきりでおむつ交換などが必要な母の介護があることや、ペットの犬がいることから、身を寄せるのは難しいと考えた。余震が収まらないなか、建物や電柱などの倒壊による被害を受けないようにと、自宅近くの商業施設の屋外駐車場に車を止めた。時間を追うごとに次々とほかの車が避難してきたことを覚えている。

避難の最中、母を軽自動車の助手席に寝かせたが、座席シートが平らにならず、思うように喉に詰まったたんを取ることができなかった。ベッドに寝かせた状態では難なくできる介護も、狭い車内では勝手が違った。公的支援も受けられないまま、夜明けになって行きつけの病院に母を連れて行ったが、停電でたんの吸引もできず息を引き取った。窒息死だった。

富永さんは訴える。「介護の必要な人や赤ちゃんがいる家族など、車中泊しか考えられない人も少なくないと思う。9年前の経験を生かして、より細やかな支援ができるような態勢ができることを望みます」

【野呂賢治、写真も】

泊は、災害時に役立てられる」との確信につながった。24年3月に被災地で定年を迎えると、翌4月に熊本市に戻り、車中泊避難の改善を目指し起業した。車中泊避難者への支援は、これまで自治体が「足を踏んできた分野だ。内閣府による23年11月の全国市区町村調査では、平時から対策に取り組んでいるとの回答は31%にとどまった。国はこうした現状を改善しよう」と24年6月に防災基本計画を修正し、車中泊避難の支援を明記。支援の手引も公表した。乳

幼児やペットを抱える人などが、不特定多数の人が一緒に生活する避難所を避け、やむなく車中泊を選んでいる現実に対応したかたじけなく。国の変化を受け、今後は多くの自治体で車中泊避難への支援が見込まれる。だが、そのための知見は足りていない。大塚さんは失敗を改善し、全国に発信することが被災地の役割。熊本からモデルを広げたい」と意気込む。それが、熊本地震で各地から受けた支援への恩返しだと考えている。【中村敦茂、写真も】

#### 車中泊避難のポイント

- 駐車場** 傾斜地は避ける。明かりや人通り、近くにトイレがあると望ましい
- 季節の影響** 夏→熱中症に注意。日陰の確保や換気を心がけ、定期的な水分摂取を 冬→低体温症に注意。雪でマフラーが塞がれると一酸化炭素中毒の恐れも
- エコノミークラス症候群予防** ・軽い体操やストレッチ ・こまめな水分補給 ・アルコールを控え、できれば禁煙 ・眠るときは足を上げる
- シートアレンジの工夫** 横になつたりできるよう、シートリクライニングやラゲージ利用を検討
- 避難アイテム** 携帯トイレ・着圧ソックス・マット・エア枕……などを準備

※トヨタ自動車製作の「車中泊避難ヘルプBOOK」を参考に作成